

名村 理*・土田 正則*

新潟大学医歯学総合病院 循環器内科
同 心臓血管外科*

われわれは、「植込型補助人工心臓(植込型VAD)」の実施施設を目指し「体外設置型VAD」の対象症例を紹介していただくをお願いしているなかで、「劇症型心筋炎」2症例に対し、「体外設置型VAD」を含む外科的補助循環治療を行ったので報告する。

1例目は54歳男性、発症6日目にIABPとPCPS下で当院に搬送され、翌日に両心VAD(左心に「体外設置型VAD」、右心に遠心ポンプ)を行ったが、ショックに対する大量の血管収縮薬を要したまま発症26日目に多臓器不全で失った。

2例目は53歳女性、発症2日目にIABPとPCPS下で当院に搬送され、発症7日目に、セントラルECMOと左室ベントを予定したが、左室内血栓が疑われ、左室はVAD用の太い脱血管を用い、結果的に遠心ポンプによる左室VAD+右房脱血のかたちをとった。23日目には左室脱血が良好となり、右房脱血は終了して、遠心ポンプによる左室、VADとし、46日目には食事摂取や端座位が可能となり、家族と談笑するまでに回復していた。リハビリを進めるため、75日目に拍動式のNipro-VADへ切り替えた後、脳合併症を発症し、88日目に失った。

劇症型心筋炎治療では、内科的に可能なIABPやPCPSでは救えない症例があるが、外科的治療として、「体外設置型VAD」のみでなく、左室ベントやセントラルECMOなどの工夫により急性期を乗り切れる症例が出てきている。

なお新潟大学では「植込型VAD」について、今年中には管理施設に、再来年には実施施設に申請できる予定であり、関連施設には、引き続き協力をお願いしたい。

6 妊娠中に深部静脈血栓症から急性肺塞栓を生じ心肺停止に至った症例の治療経験

中村 制士・大西 遼・岡本 竹司
青木 賢治・榛沢 和彦・名村 理
土田 正則

新潟大学大学院医歯学総合研究科
呼吸循環外科学分野

症例は24歳、女性。妊娠9週。2日前より認める左下肢の腫脹を主訴に当院救急外来を受診した。下肢静脈エコー検査で左腸骨静脈末梢から膝窩静脈に充満する血栓を認め、深部静脈血栓症の診断で当科へ入院した。入院後ヘパリン持続静注を開始し、安定した後にヘパリン皮下注に変更を行い退院となったが、退院翌日肺塞栓症を生じショック状態となり救急搬送された。本症例では妊娠早期であり胎児被爆の可能性から入院時CT等の精査が不十分であったこと、ヘパリン持続静注から皮下注への変更後D-Dimerの再上昇を認めていたこと等、評価法や治療法について再検討すべき点が認められた。それらに関して当科における過去の事例と比較し検討を行った。妊娠による肺塞栓症は、発生頻度は低いものの母体胎児ともに重篤な経過をたどることがあるため、妊娠早期で評価が困難な場合は評価可能な週数まで入院加療を継続し、十分な評価と治療を行う必要があると考えられた。

II. 特別講演

1 静脈血栓塞栓症の診断と治療

～ガイドライン改訂に向けて～

三重大学大学院 循環器・腎臓内科学

伊藤 正明

深部静脈血栓症(DVT)および急性肺血栓塞栓症(PTE)は静脈血栓塞栓症(VTE)と総称され、高齢社会の到来、食生活の欧米化、診断率の向上などの要因により、確実に増加してきている。特にPTEは致命的な急性疾患で、周術期や長期臥床などと関連して院内合併症として様々な診療科で突然発症し、また最近の熊本地震でも話